

当連載では、組合員参加の復興支援活動を紹介します。

No.3

冷たいメニューが好評 コープおおいたからの支援物資も活用 “夏”の炊き出しボランティア 福島と郡山で実施



スイカは氷水を入れたビニールプールでよく冷やされ、提供されていた。

コープふくしま

7月22日(金)、コープふくしまと福島生協労働組合は、福島市あづま総合体育館にて、炊き出しボランティア「夏を乗り切ろう! 400人でスイカ食べ放題」を実施した。これは同体育館に設けられた避難所に入所する南相馬市、大熊町、双葉町などの住民560人を対象とした炊き出し活動で、6月22日より週末を中心に続けられているものだ。他にも郡山市の催事施設ビッグパレットふくしまでも活動を行なっている。

この日は30個のスイカが提供されたが、毎回暑さを考慮したメニューを選んでいる。冷やしうどん、

フルーツの盛り合わせ、かき氷などが振る舞われており、「暑くなってきたのでうれしい」と好評だ。

また、震災直後にコープふくしまに支援スタッフを送って以来、絆を深めたコープおおいたからの支援物資を用い、7月15日には「吉野鶏めし」、22日には「やせうま^{*}」と、大分県の郷土料理も振る舞われ、こちらも好評を博した。

今回の取り組みも、「長引く避難生活を送っている方に、少しでも元気になってもらいたい」(組合員理事 池田親子さん)、「同じ地域に住む人の役に立ちたい」(組合員理事 渡辺洋子さん)といった思い

を持つ組合員が多く参加。「相手の気持ちに寄り添った行動とは何かを考えさせられます」(組合員理事長 谷川千代さん)と各々ができることに取り組んでいた。

炊き出し活動をリードするコープふくしま・生活文化部の組合員活動課長である酒井孝子さんは、「3月から6月にかけては、被災した組合員同士の支え合い、放射能の正しい知識を学ぶ勉強会の実施で精いっぱい。今回のボランティアはそれが一段落したことで可能になりました」と話す。

福島産の夏野菜を振る舞う7月29日の第8回でいったん終了するが、福島生協労働組合の後藤剛志さんは次の動きも視野に入れている。「間もなく、被災された方は避難所から仮設住宅に移られます。今後は次の段階で必要となる支援を考えていきたい」

「力の結集を感じた一日だった」(組合員理事 小澤和枝さん)との言葉から分かるように、「生協が今、すべきこと」にみんなが集中し、一体となっている。



ボランティアに参加した、組合員、職員の皆さん。



この日は、スイカとやせうまが振る舞われた。手前がやせうま。

* 小麦粉で打った平麺にきな粉と砂糖をまぶしたもの。